

大分ゆかりの音楽家達

藤原義江、中山梯一と、日本を代表する音楽家の系譜が、立川清登（澄人）に始まる次世代へと引き継がれ、今も大分を経由して飛躍していく音楽家達が続いている。今回はそこに焦点を当ててご紹介していこう。

まずは1998年、第11回チャイコフスキー国際音楽コンクール声楽部門で日本人初の1位を受賞したソプラノ歌手の佐藤美枝子だ。彼女は大分出身で県立芸術文化短大附属緑丘高校（当時）を経て武蔵野音大を卒業後に頭角を現し、単身このコンクールに挑戦して栄誉を得た。高い音を軽々と転がすように歌うコロラテューラ・ソプラノで、国内のコンクールでも優秀な成績を上げていたが、この受賞によって更に大きな注目を浴び、今は藤原歌劇団のプリマドンナとして活躍している。

一方、ウィーン国立劇場で6年間専属歌手として活躍したソプラノの佐々木典子は、父親が大分県立病院の医師だったこともあり、小学生時代までを大分で過ごした。今は東京芸術大学の教授として後輩達の指導に当たりながら、表現力抜群の声を活かして、オペラに、歌曲に大活躍している。



オペラ「蝶々夫人」(写真提供/東京二期会)

その後、武蔵野音楽大学を経てイタリアに渡って大成した。日本を代表する3つの声楽コンクールを同年にすべて優勝し、「3冠王」と大評判となり、イタリア、英国などの欧州各地や米国、カナダにおいて、『蝶々夫人』はじめ、イタリアオペラの主役を次々に務め、現在、傑出した芸術家として米国で永住権を得て居住している。

阿部容子は、かつて東京二期会のプリマドンナとして、労音や文化庁の巡回公演で声域の合う有名オペラのソプラノの主役をほぼすべて歌ったキャリアを持つ。

日本のオペラシーンで活躍する歌手達で、大分出身者は多く、いずれも美声である。

東京二期会が50周年記念公演を行った際には、ワーグナー作曲の『ニルンベルクのマイスタージンガー』、リヒャルト・シュトラウス作曲の『バラの騎士』の大作で共に主役を務め、絶賛を博した。特に、来日した欧米のオペラ指揮者や演出家からも高く評価されており、NHKニューイヤーパーラコンサートの常連でもある。

NHKニューイヤーパーラコンサートといえば、数年前、揃って出演を果たした逸材として、パロツク、ルネッサンス時代の曲などの分野の、ソプラノ歌手、野々下由香里（東京芸大 古楽科主任）と、15、18世紀の歌曲を歌うコンサートツアーを重ねているメゾソプラノの波多野睦美の2人が挙げられる。彼らは進学校で有名な県立大分上野丘高校の同期生でもあり、共に宮本修に師事し薫陶を受けている。付記するが、その宮本は中山梯一の弟子であり、その後長く大分県立芸術文化短期大学（以下、芸文短大）の教授を務めた。

また大分の芸文短大を卒業したソプラノの木下美穂子（鹿児島県出身）も、その芸文短大で恩師である阿部容子に巡り会ったことで、大分を第二の故郷と言って憚らない。

大分工業高校を卒業後、国立音大

大学院まで進んだバリトンの馬場眞二などは良い例で、演技にも優れ、二期会オペラの貴重な脇役として活躍している。平成21年11月に立川澄人没後25周年を記念した名作オペラコンサートが県民オペラ協会の主催で開かれた。馬場は、かつて立川清登の決まり役だった『吉四六昇天』の吉四六役を歌って、『立川の再来』と高い評価を受けた。

宮崎県出身ながら大分の芸文短大を経て東京芸大に進んだバスの伊藤純も端正な舞台姿で人気を誇っている。

若手を見ても、続々と有望な歌手達が続いているのは、師匠から弟子へと伝えられていくクラシック歌手の系譜によって、先達の歩いた道をたどって行く、良き伝統とも言える流れがあるからではないだろうか。



中山欽吾

なかやまきんご

iichiko 総合文化センター館長
(公財)大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
(公財)東京二期会理事長

Aria -大分音楽幻想-

